

【ねがいましては】

令和6年2月4日

KYOWA SCHOOL

第404号

「機中八策」

千葉県中央児童相談所所長、渡辺 直（ただし）さんの記事（読売新聞 R6.2.3）からです。

まず、負の連鎖から。職員の方が親の虐待行為を指摘し、「やったことを認めますか」「反省していますか」「こんなことはだめですよ」など、注意喚起するようなやり方だそうです。そう言われた親はまず100%感情的になってしまうそうです。その感情のまま職員とのやりとりの結果、「こんな家族のもとに子は帰せない」と所員は判断。そこから悪循環が始まり施設での長期保護につながるそうです。

そこで渡辺さんは記事の中で「子どもが青ざめる伝わりにくい対話」と「子どもとの対話を円滑にする機中八策※」

（※ 渡辺さんが坂本龍馬の出身地である高知県出張帰りの飛行機内で思いついたので「船中八策」になった）を掲げています。

子どもが青ざめる伝わりにくい対話

ひ	否定	(テレビばかり見るな)
ど	どなる	(いつも言っているでしょ)
い	嫌みを言う	(いつもこうだったらね・・・)
お	脅す	(今日は承知しないよ)
と	問う	(宿題はやったの)
ぎ	疑問形	(何やっているの)
ば	バツを与える	(1週間テレビ禁止)
なし	なじる	(何回言ってもわからないの)



上記をまとめて一つの文章にまとめてみると

「何やっているの、いつも言っているでしょ。テレビばかり見るな、今日は承知しないよ。1週間テレビ禁止。宿題やったの？ 何回言ってもわからないの。いつもこうだったらね。」と、なります。

左に掲げましたのは、新聞にそのまま載っていた内容です。まず「青ざめる」方から、「ひどいおとぎばなし」の中で、ひとつも言ったことはない、自信をもって言える方はいらっしゃるでしょうか。そして下段の「円滑にする」方ではどうでしょうか。「ほまれかがやきを」のすべてで接していらっしゃるでしょうか。

反省しきりの方が多数のような気がいたします。

でもへこたれないでください。

渡辺さんはまず親御さんに問いかけます。「子どもの安全について、親のあなたが子どもの視点で考えた時にどう捉えますか」という問いかけからスタートするそうです。「子を同じ目に遭わせないために、親御さんが主体になってどういうことができそうですかね」というスタンスで向き合います。

この記事の例では、宿題をやってくれるよう促していきます。

私は宿題について異論があります。世界の宿題状況によると、アメリカ・フランス・オーストラリアなどでは宿題はありません。世界的に見ても宿題を出していない国の方が多いのが現状です。

私の持論は、「宿題は自分で作るもの」です。自宅へ帰っても今日勉強したことの続きをしてみたい・・・というのが理想的な学校像だと思っています。それだけ教師の手腕が試されることになります。また、日本のように多人数で一斉授業では全員がそ

のような気持ちになりにくいことも確かだと言えます。

私のところへ通ってくる子どもたちの多くは学校からの宿題に取り組みます。そこで感じる『つまらない』です。これと同じ表情を家でも作っているのかなと思うと、親御さんが感情的になる理由がわかります。宿題を「楽しい！」と感じながら向かっている子をさがすことは困難に近いと思います。その

子どもとの対話を円滑にする機中八策

ほ	褒める	(えらい。わかってくれてありがとう)
ま	待つ	(話せる状態を待つ)
れ	練習	(明日から学校から帰ったら何をする?)
か	代わりにすることを提示	(でも、まず宿題をしてほしいな)
が	環境づくり	(穏やかに近づき)
や	約束	(わかった?)
き	気持ちに理解を示す	(テレビ見たいよね)
を	落ちつく	(深呼吸)



上記をまとめて一つの文章にまとめてみると

「深呼吸。話せる状態を待つ。穏やかに近づき、テレビ見たいよね。でも、まず宿題をしてほしいな。わかった？ 明日から学校から帰ったら何をする？ えらい、わかってくれてありがとう」と、なります。

くらい子どもにとっての宿題は『親と子の間に青ざめる感情を作らせる具体物』のような気がいたします。

「いつまでかかってんのよ」「はやく終わらせなさい」「やらないと学校でしかられるわよ」「・・・」

「やらないとしかられるから」と思いながら向かっている子は多いはず。また、宿題はやってあればよい具体物でもあります。英語で言うところの「do homework」です。「learn」に結びつきません。真の学び、楽しもうね！